

熊本地震における熊本イスラミックセンターの活動について

Marlo Siswahyu (マルロ・スイスワヒュ)

熊本におけるムスリムの現状

熊本市は九州の中心に位置し、国内外から多くの観光客が訪れます。現在、熊本には約 350 人のムスリム（イスラム教徒）が生活しています。その多くは留学生、研究者や就業者です。熊本のイスラム・コミュニティに於いて一番多い国籍はインドネシアで、二番目はバングラデシュとなります。その多くは熊本大学の研究者（大学院生）です。

熊本イスラミックセンターのメンバーの出身国はインドネシア、バングラデシュ、パキスタン、マレーシア、エジプト、アフガニスタン、スーダン、キルギスそして少数の日本人で構成されています。メンバーの多くは黒髪及び本荘周辺に住んでいます。

熊本イスラミックセンターはムスリムがイスラム教育を学び、一緒に集い神へ祈りをささげる場所です。

熊本地震

2016 年 4 月 14 日（木）午後 9 時 26 分、近年にないマグニチュード 6.2 の大地震が熊本を襲いました。外国人にとってこの様に大きい地震は今までに経験したことのないもので、大変なショックを受けました。ただこの地震の後は多くの仲間は普段の生活を送っており、今後はこれ以上大きな地震は来ないだろうと考えていました。

4 月 16 日（土）午前 1 時 25 分、マグニチュード 7.3 のさらに大きな地震が熊本を襲いました。この地震は私達に壊滅的な被害と大変大きな心理的なショックを与えました。何人かのメンバー（特に子どもと女性）は、この地震によりトラウマを抱え、家に帰ることができなくなりました。また水や食料を確保することも大きな問題でした。



多くのメンバーは熊本大学と熊本市国際交流会館へ避難しました。何人かは一時帰国し、近隣の県、福岡や広島へ一時避難したメンバーもいました。

2 度目の地震では熊本イスラミックセンターの建物も被害を受けましたが幸運にも誰も怪我することなく建物外へ全員無事に避難することができました。

熊本イスラミックセンター災害救済支援ポスト

4 月 17 日から熊本イスラミックセンターとインドネシア大使館、福岡マスジドと協力して災害救済支援ポストを開設しました。大人や子供を含む 84 名のインドネシア人が熊本大学に避難していました。インドネシア大使館は A S E A N 諸国の中で最初に災害救済チームを熊本に派遣し、熊本大学に避難していたインドネシア人被災者やベトナム人被災者のケアにあたりました。黒髪周辺に住む外国人達は熊本大学へ、九品寺周辺に住む外国人達は熊本市国際交流会館へ避難しました。

毎日日本全国のムスリム達から様々な支援・救済物資などが届きました。地震の後は配達手段（宅配便等）が手配できなかったため、全国からのムスリム支援者達は自分達で車や、トラックを手配し、運転して熊本まで運んでくれたのです。中には東京や大阪、名古屋や富山からも支援物資を運んでくれました。支援物資の多くは食料、水や薬などでした。

この様に全国各地から大量の支援物資が送られてきたため、熊本県内のいくつかの避難所に支援物資を配ることとし、各地域に数組の担当チームを作り支援物資を配りました。



支援物資の分配

熊本大学避難所ではムスリム用のハラルフードが十分ではなかったため、熊本イスラミックセンターに臨時の調理場を作り、避難所に配布しました。もちろんハラルフードはムスリムでもない人も食べることができるので避難所にいる日本人の人達にも配りました。

温かい食事は喜ばれ、熊本イスラミックセンター周辺の住民や、熊本大学以外の避難所の人達も温かい食事を受け取りにきました。

支援物資を配ることで一番大変だったことは、持ち込む許可を取ることと、必要としている人達を見つけることでした。私達にとって自治体や避難所などの責任者から支援物資を分配する許可を得ることは簡単ではありませんでした。最初の頃は熊本イスラミックセンターの名前を出すと断れました。たぶん、日本人にとってイスラム教徒は怖い・信じられないなどのイメージが強いのかも知れません。毎日のようにテレビでイスラム過激派のテロ行為が放送されていたのでしょうがないのかも知れません。

この問題を解決し、スムーズに支援物資を必要とところに配れる様にするため、どの自治体や避難所での様な支援物資を必要としているか等正確な情報と協力を得るため、警察や熊本市国際交流振興事業団に相談しました。

その協力を得て、私達は水や食料、その他生活用品（トイレットペーパー、生理用品、ティッシュなど）等を必要とされているものを益城町、



御船町、大津町などにある避難所等で必要としている人達へ直接渡すことができるようになりました。

私達は車に避難している人達や壊れた家で避難生活をしている人達にも直接支援物資を配ったりしました。多くの人達が避難所での生活よりも車中泊や自宅での生活を選択していることに驚きました。また何人かの年配いた日本人の避難者は疲れ、生活を再建する気力も失ったように、壊れた家を眺めていました。

今後、私達ムスリムとムスリムでない人々が共に助けを必要としている人々を助けながら共に生きる、強い社会的絆を持つ社会を日本で作っていきたいと思います。